第 10 回発行

ぷらんこ

令和２年７月３日(金)
おおむたこども園
金丸恵美子

『センス・オブ・ワンダー』

～美しいもの、未知なもの、神秘的なものに目を見はる感性～

人は、誰もが『美しいもの、未知なもの、神秘的なものに目を見はる感性』をもって生まれてくるそうです。子ども達は虫や動物、草花や木そして、水や土など。身の回りのありとあらゆるものに興味を示し観察、探究します。

雨や雪が降る、七色の虹がかかる、雷が鳴る、日が沈み夜がくる…。子ども達はこのような現象を不思議がり、擬人化して捉え、まるで魂のあるかのごとく想像しているでしょう。私達大人も子どもの時は、そうだったはずです。ところが、いつしか大人になるにつれ、子どもの時に持っていたあの感性が、薄らいでいくのでしょう。しかし、大人になってもその感性を持ち続けている人もいます。作家の宮沢賢治や漫画家の手塚治虫などは、幼い頃の感性を持った究極の『☆センス・オブ・ワンダー』の持ち主だったのではないでしょうか？

私達は、子ども達の『センス・オブ・ワンダー』を大切に育てるべく、庭に木を配置し、花や野菜を子ども達の手の届く所に植えています。小さかった野菜の苗が伸び、花が咲き、きゅうりになる。動かないと思っていた、植物が生長して実が成る。これに気付いた子ども達の歓声は、感動にあふれています。園の庭で不思議に会うのは、草木だけではありません。『火』も『水』も『土』も…。子ども達の感性に磨きをかけてくれることでしょう。ゲームなどのバーチャルの世界では決して育たない感性です。そして、私達保育者もまた、子ども達からのあふれ出る感性に、忘れかけていたものを再び目覚めさせてもらっています。

子ども達が『美しいもの、未知なもの、神秘的なものに目を見はる感性』を大人になっても忘れず、生涯を通して持続できるように、こども園の庭で、育んで欲しいと願っています。

☆参考図書『センス・オブ・ワンダー』　レイチェル・カーソン(新潮社)

子ども主体の遊びの秩序とは…

各クラスには、それぞれ数種類の積み木などで作る構成遊びのコーナーがあります。いつ見ても、子ども達の作った素敵な建物や想像の世界が広がっています。これは、片付けたりせず、遊びの続きが出来るようになっています。そして誰が作ったものかが分かるように子どものシンボルマークを置いて『触らないでね』、『壊さないでね』のサインにしています。

一見、何でも自由に遊んで良いかのように受け取られますが、決してそうではありません。各遊びのコーナーごとにルールがあり、子ども達の遊びの秩序が、守られているのです。その遊びの秩序は、縦割りのクラスの中で、年上の子ども達から年下の子どもに達に伝承されていきます。

大人が押し付けたルールではなく、子ども同士の決まりごとだからこそ自然に身についていくようです。以前は、作った物を壊されると(わざとではなくても)カッとなって、これまで積み上げたものを自分の手で乱暴に崩したり、相手を激しく責めるたてる子どもも少なくありませんでした。

しかし、今では、『良いよ、またすぐ作れるから』とか『大丈夫だよ』と相手を許すことが出来る子ども達が増えてきました。そして、より壊れにくい組み方を考えるきっかけにもなっています。

たて割りクラス編成になって 4 年目。子ども達の中にある、『目に見えない秩序』と『相手を許す』気持ちが、子ども主体の保育を進める上で、とても重要なウエイトを占めていることをひしひしと感じるこの頃です。